

8週齢以前に親兄弟と引き離された犬の問題行動について

～ 堀明著『犬は「しつけ」で育てるな！』要旨解説

哺乳類一般に当てはまることですが、幼少期に、必要な刺激や母親からの愛情を受けないと、知能そのものが遅滞してしまい、精神的・肉体的な疾患の原因になります。

イヌの場合、7週齢以前に親兄弟から引き離され、学ぶべきことを学ばないで成長すると、必ずなんらかの問題行動が現れます。学習能力そのものが獲得できず、「しつけ」を試みても効果がない、ということさえあります。その結果、犬の飼育を放棄し、殺処分したり、飼育怠慢（ネグレスト）に陥る飼い主も少なくありません。

子イヌは、少なくとも10週齢まで親兄弟と過ごすことで、イヌ語（＝ボディーランゲージ）や咬みつきの抑制、あいさつ行動などコミュニケーションの基本を学ぶことができます。見逃してはいけないのは、イヌどうしのコミュニケーションについて、人間は絶対に教えることができないという点です。その意味で、7週齢までの経験がイヌの一生を決定付ける、といっても過言ではありません。

筆者は、約400頭のイヌを対象に、その社交性のようす（社会化されているイヌと初めて対面した際、どのように反応するか）を観察し、飼い主から得たアンケート（イヌの入手時期とルート、ほかのイヌとの日常の接触状況など）を解析しました。その結果、親元から離された時期とほかのイヌに対する態度には、強い相関関係があることがわかりました。

- **5週齢以内**に親兄弟から引き離されたイヌは、例外なくほかのイヌを極端にこわがる。震えだすか、逃げ惑う。性的関心もほとんど持たない（雌は交配がとても困難）。攻撃をしかけるイヌもいるが、これは恐怖感からくる防御的な攻撃と思われる。
- **6週齢～7週齢**。「怖がり」は多少ゆるむ。個体によっては、ほかのイヌをほとんど恐れないものもいるが、これはイヌに関心を示さないことを意味しているにすぎない。**イヌ本来のアイサツ行動やボディーランゲージをきちんと表現できるわけではない。**
- **8週齢～10週齢**。ほかのイヌと出合ってから、ある程度時間が経つと、いっしょに遊ぶようになる。
- **12週齢**。ほとんど問題なく遊べる。社交的な態度がとれる。

16週齢のイヌの行動も観察しましたが、このイヌは初対面の相手にも、まるで以前からの顔見知りのようにふるまいました。

例外もあります。家庭の中に先住犬のいる場合やワクチン接種前から近所のイヌと頻りに遊んで育った場合、ほとんどのイヌは、ほかのイヌを怖がりませんでした。

※詳細については、『犬は「しつけ」で育てるな！』（築地書館）P130～P160